

相愛大学研究シーズ集

シーズ名	中世王家の存在形態および中世の寺社参詣についての研究	
所 属	人文学部	人文学科
氏 名	曾我部愛	
【概要】 中世における寺社参詣は、院政期に王家(天皇家)の構成員である院・女院らが畿内各地の寺社に参詣したことを嚆矢とする。院・女院らの寺社参詣にともない、参詣のシステム(参詣路・宿泊地・参詣作法など)が整備されて、広く民衆に至るまで参詣ブームをもたらしたのである。この中世の寺社参詣について、院政期から戦国時代までを対象に、その実態を明らかにするべく研究を進める。 研究を進めるにあたっては、以下の3点に注目する。 ①中世王家の政治的動向と、中世における寺社参詣の展開を連関させる ②畿内、とりわけ大阪地域(摂津・河内国)を題材として、寺社参詣の実態解明と、寺社参詣の盛行がもたらした地域の発展・交通網の変化などを明らかにする。 ③寺社参詣のなかでも、これまで論じられることの少なかった「女性の参詣」に注目し、「女人禁制」寺院の問題に触れながら、近世における「女人高野」の登場などとのつながりを明らかにする。 上記の3点を本研究の重要な分析視角として、中世の寺社参詣に関わる史料の収集・分析を行い、参詣の実態を明らかにすることを目指している。		
キーワード	日本中世史、王家論、寺社参詣、女性史	